

キュウシュウ 希望を贈る

ヨーロッパ人にとって遠い国である日本から、お客さんが来るのは初めてではありません。2年前に、社会エコロジー同盟「チェルノブイリ」は、「スタイキ」にチェルノブイリ「ゾーン」の子供たちの健康回復のための計画を企画し、そして実現させました。

青少年健康回復センター「サナトリウム・キュウシュウ」にはすでに500人の子供たちが利用しました。カリニコピッチ、ゴメリ、レシチツツ、スベトロゴルスクの子供たちです。

私たちのパートナーはセンターに対して色々な物的援助をしています。医療機器や食料品などがそうです。今回も彼らは自動血球測定器をもって来てくれました。さらに、彼らの援助でさまざまな病気の検査と治療のための医療機器「ヘルペル」、「エキスペルト」もそろえることができました。今ではセンターでは患者さんが満足できるほど健康回復のための設備が完備しつつあります。

私たちのパートナーは引き続きチェルノブイリ問題に取り組んでいます。彼らはベラルーシに滞在中、30キロゾーンにもおとずれました。それとモズィリ、ホイニキ、スベトロゴルスクの人々とも会いました。

下の写真は彼らの帰国直前に撮影したものです。(氏名列挙)

健康回復センター主任医師A. ガビドウリン

「チェルノブイリ通信」No.22をお届けします。パレスカヤ・ゾーラチカの一行がベラルーシへ帰国してそろそろ一カ月が過ぎようとしています。ほんとに嵐のようにな一瞬でした。ミンスクからはさっそくお礼のFAXが届いています。みんな元気に帰り着いたようです。今回の受け入れはほんとに苦難の連続でしたが、どうにか無事に終わることが出来ました。みなさん。どうもお疲れ様でした。各地の取り組みの報告は新聞の切り抜き記事に譲ることにしますが、大まかな流れだけ紹介しておきます。

■ 旅の疲れはスイミングで!？。

ベラルーシ共和国はもちろん海のない国です。ちなみに山らしい山もない国です。そんな国の子供たちを喜ばそうと思えば、海を見せるしかありません。そういう訳で五日、六日は糸島に宿泊し、ゆっくり疲れをとってもらう予定をたてました。糸島の海岸を散策したり、甘蔗さんのお寺で仏教の神秘に触れたりしながらです。それはそれで喜んでもらえたのですが、子供たちの心は『スイミング。スイミング。』のようです。『いつになったら泳げるのか』と催促のあと、ようやく人気のない海辺に出て待ちに待ったスイミング。海月に刺され『痛い!』と悲鳴を上げながらも心行くまで海水浴を楽しんだようです。『日本人は見てるだけでどうして泳がないんだ』と通訳のタマラさん。『日本はもうシーズンじゃないですよ。』というのと、『これだけ暑かったら、ベラルーシじゃ真夏よ』

と一人沖合まで泳ぎだし、達者ぶりを披露していました。泳ぎはこの日だけの予定だったのですが、なんと七日の福岡公演当日も『スイミング』してしまい、その後も『今度はどこで泳げるのか。』『子供たちはお風呂でスイミングしているよ。』という調子でした。結局、最後の宗像での二日間、スイミングのプレゼントとなりました。

■ おかげさまで大成功!

こんな調子で当日を迎えました。九月七日の福岡公演を皮切りに、最終日十八日の宗像公演まで、阿蘇でのキャンプを含め一〇カ所での公演と交流を行い、全体の参加者は三五〇〇人を越える盛況ぶりでした。各地それぞれに手作りの企画を盛り込み、最高の接遇に努めました。

福岡では、偶然にも福岡大学の訪問研究員としてミンスクから来ていたキルバス・アナトリーさんが新聞を見て駆け付けてくれました。北九州市と別府市では学校訪問をし、子供同士の交歓会をしています。阿蘇のキャンプは地元の子供会総出で、それこそお祭りでした。鹿児島では始良郡始良町の青雲病院がボランティアで子供たちのエコー検診や血液検査などをしてくれました。結果は、八才の子に甲状腺萎縮が見られ、四人が白血球過多という診断でした。下関市では在日の子供たちの歌声も披露されました。ホームステイをした長崎、宮崎、大分、宗像では、それこそ涙を流しながらの「別れ」となったそうです。

本当にすばらしい出会いと大きな感

動を残していってくださいました。

■ 宗像で医療機器・医薬品を贈呈!

最終日の宗像（福岡町公民館）で医療機器の贈呈式を行いました。機器の方は、七月に持っていけなかった血液分析器です。それに試薬、総合ビタミン剤、風邪薬などです。また当日は、「チェルノブイリ救援・えひめ」のメンバーも二人お土産をもって駆け付けてくれました。総合ビタミン剤を段ボール一箱と2m四方の大きなパッチワークを5枚。サナトリウムに飾ってほしいと、『反原発』と子供たちへの思いが縫いこんでありました。

今回の医療機器はモズイリ市子供病院へ送り届けられます。アンサンプルの子供たちはモズイリ市を出発するとき、町を上げての見送りを受けたそうです。『機械と薬をちゃんともらってくるんだよ。』と励まされての見送りだったそうです。彼らにしてみれば、それほど大きな期待を背負っての来日だった訳です。モズイリ市は人口一三万五千人の町ですが、甲状腺を調べるためのエコーは、地区病院に一台あるだけです。血液分析器は今回贈呈したものが第一号というわけです。汚染地であるにもかかわらず医療の現状は厳しいものがあります。

■ 第四回総会を開催します。

「支援運動・九州」の第四回総会を開催します。「今年こそは一泊二日の合宿総会を」と考えていたのですが、

中々難しいものがあります。来年こそは温泉につかりながら、のんびりと総会を迎えたいものです。

さて、支援運動もはやいもので四回目の総会を迎えることになりました。当初百数十名で出発した支援運動も、今では二〇〇〇名を越えるネットワークとして広がりを見せています。そして運動もより具体性と責任を持った運動へと発展してきました。とくにこの一年の取り組み、そしてこれからの一年は、まさに私たちの運動の真価が問われる一年になるのではないかと、そんな気がしています。

そういうわけで、この一年の運動を振り返り、今後はどう生かしていくのかをしっかりと考えていきたいと思えます。

一つには、「サナトリウム・九州」の今後の運営についてが大きなテーマになります。

昨年、「サナトリウム・九州」をオープンさせるにあたって、「サナトリウムにかかる費用は、一人につき一か月三五〇〇円。一人の子供のサナトリウムへの入所期間が一年として、その間の費用を里親として一年の間面倒を見ていく」という「里親運動」を呼びかけました。おかげさまで予想を上回る方々に「里親」になっていただき、「サナトリウム・九州」は順調に運営されています。医療機器も整い、ますますその重要性も増しています。

ところが一つ問題がでてきました。それは当然の事なのですが、サナトリウムへの入所希望者が殺到したことです。サナトリウムへ入所したいという希望者があまりに多すぎたため、「入所期間を短くして、より多くの子供た

ちを受け入れる」ことにしました。そのため「一人の子供の入所費用を一年間面倒みる里親に」という呼びかけには無理ができませんでした。

また、混沌の中にある旧ソ連邦、そしてベラルーシ共和国。混乱する政治と経済は、物価を大きく押し上げてしまいました。そのためサナトリウム開所当初に比べ、維持費が三倍になっています。ベラルーシの経済がインフレでもドルや円が安定していれば関係ないのではないか、と思われる方もいると思いますが、そうではありません。ルーブルと円の交換比率は、昨年末で一円＝二ルーブルでした。現在は一円＝九ルーブルです。ところが、物価の上昇はこの二年で三〇〇倍になっています。いくら円が強くても追い付かないのが現実です。

そういう訳で、「一人につき一カ月三五〇〇円」というのが、現在では「一人につき一カ月一〇〇ドル」になっています。

以上のような理由で、「サナトリウム・九州」の運営、維持のためこの一年間、「里親」ということで呼びかけとお願いをしていましたが、今年度からは「里親」ではなく「運営委員」ということでご協力をお願いしたいと思っています。ネーミングについては検討中ですが、意味としては前述の通りです。

次に、会員制、事務局（体制）の問題もあります。これまで年会費一〇〇〇円ということで事務経費を捻出してきました。以前からギリギリの線で運営していたわけですが、もはや限界というところまでできています。そこで他団体の運営方法を参考にさせてもら

ことにしました。

こういうものです。

- ①、年会費二〇〇〇円、賛助会員年一万円、というものや
- ②、募金の一割から二割を自動的に運営費に充てる、というものです。

どちらにするかは、総会で決めたいと思います。ご意見をお聞かせください。

事務局体制、機能の問題ですが、事務量等の多さのため、処理が遅れ遅れになってしまっています。事務の遅れは、信用の問題にも響いてきます。そこで、今期から事務局員の半専従体制で運営していきたいと思っています。具体的にどういう体制が現実的で望ましいかは現在検討中です。

その他、いろいろありますが、総会の場でじっくりと議論してみたいと思います。

と き：11月28日(日)

午後1時より～

と ころ：ひびき荘

(北九州市小倉北区大門、JR
小倉西駅下車、徒歩3分)

☎/581・5673

内 容：この一年の取り組みと
反省、第三次調査団の
ビデオ報告、他。

【チェルノブイリ第三次調査団報告】

第三次調査団報告です。報告集としてまとめようかとも思いましたが、また大変な労力と経費がかかりますので、通信のなかで、何回かに分けて報告したいと思います。

■ 七月十一日(日)

【出発】

七月十一日、成田一三時発SU五九〇便でモスクワに向け出発しました。当初予定では、一四時発SU五八八便だったのですが、急きょ変更。このあたりから今回の旅の厳しさが見え隠れか。支援物資をスムーズにベラルーシ運ぶためにロシア大使館の通関許可証をもらおうと、全リストの形状、重量、値段を英文で作成し、提出したのですが、「チェルノブイリ同盟からの受け取り証(予定)」が間に合わずに通関許可証はもらえませんでした。ロシア大使館の保証書がないため、アエロフロートとの交渉もままならず、二七〇kgもオーバーした支援物資の取り扱いが第一の関門でした。機内持ち込みは一人二〇～二五kg。個人の荷物はできるだけ少なくするように事前に確認していましたが、それぞれの手荷物はすでに「ミキプルーン」(大分の会員より七〇kg寄贈)で満杯になっており、二七〇kgのオーバーはどうすることも出来ません。粘り強く交渉を行い

一七〇kgまでは運んでもらえることになり、残りの一〇〇kgのうち、二台持ってきている血液分析器を一台(一〇kg)と自動血球計測機用の希釈液半分(四〇kg)を送り返し、残り五〇kg分を二六万六四〇〇円支払って運ぶことにしました。

【支援物資】

今回、私たちが用意した支援物資は、医療機器として自動血球計数装置(LC-360)一台(三〇〇万円)、血液分析器(コバスレディー)二台(二〇〇万円)とそれぞれの機器に付随する試薬を一二〇〇人分(二〇〇人×六ヵ月、三五〇万円)、それに放射能測定器一台(二〇万円)、ミキプルーン七〇kgとサナトリウムの運営費として二万ドル、合計一一〇〇万円相当の支援物資です。十二月訪問の際に超音波診断装置を持参していますので、今回持参したこれらの医療機器と合わせて「サナトリウム九州」は、診察・検査についての医療体制は整うことになります。

【モスクワは】

成田を二〇分遅れで離陸し、約一〇時間かけてモスクワ・シュレメチボ空港に着いたのは日本時間二三時五分、現地時間では一八時五分でした。日本との時差は五時間。

日本を出発するとき、梅雨明けも間近に感じられる真夏の日差しが見送ってくれていましたが、八〇〇〇キロ離れたモスクワの上空は、どんよりとした厚い雲に覆われていました。『うー 寒い。』見るとモスクワの人たちは、日本で見る冬の格好をしています。皆、オーバーやセーターを着こんでいるのです。半袖しか持ってきていない私は、『今日は雨が降っているから寒いんよ。晴れればこっちだって暑いんだから。』と強がってはみたものの、それ以来ウィンドウに飾ってある服を見つけては、似合そうな上着を物色していました。

さて、第二の関門であるモスクワ空港の税関。予想どおりの厳しさでしたが、どうにか通過できました。ここでもベラルーシ側の受取証が無いことが問題となる。

空港にはしばらくしてチェルノブイリ救援モスクワ連絡事務所のアルチェフさんたちが出迎えに来てくれた。二台の車に支援物資を積み込み、事務所へ移動する。事務所には日本語の話せるアントンさんがいる。『深江さん。思うのですが、支援物資を車で運ぶのは少し大変です。ちょうどあなたたちは夜汽車でミンスクに入ります。座席も一人分空いているので、そこに荷物をおけます。そうしたらどうでしょう。』ということになった。いろいろ話を聞いてみると、ロシアとベラルーシ、ウクライナの国境が厳しくなっていること、特にチェルノブイリの支援物資関係は、政府自身が物の流れを把握しようとしているためだといいます。だから「受取証」がいるのか、ということでした。事務所で紅茶をご馳走になり、

ホテルに移動。かるく食事を済ませ、取りあえずワインで乾杯し旅の疲れをいやすことにします。

■ 七月二日(月)

相変わらず夜は二二時を過ぎないと暗くならないのに、朝は早いので調子がかめない。今日の予定は、ベラルーシ大使館へ行ってビザ申請を行い、午後チェルノブイリの英雄たちが眠る「ミチノ墓地」へお参りに行くことです。

今年の二月までは東京のロシア大使館でベラルーシ行きのビザを取ることができたのですが、三月からは「ロシア共和国以外のビザ発給業務はいたしません」ということになった。しかもモスクワのベラルーシ大使館では「ビザ申請書はロシア語のタイプで打ったものしかうけつけない」ときています。これでは普通の旅行者はベラルーシに入ることはできないのでは、という気がします。申請書の方はモスクワ事務所の方で事前に準備をしてもらっていたので、それぞれの写真を貼ってベラルーシ大使館に持っていきました。するとやはり一千万円を越える支援物資が問題になりました。『受取証はどうした。だれが受け取るのかはつきりしなければビザは出せない。』という答えでした。受取証についてはミンスクに電話を入れていたので、FAXですぐに送ってもらい、夕方出来ているはずのビザをもらいに再度大使館へ。すると今度は『明日もう一度こい』と。とてもそんな悠長なことはしておれないので、ビザはミンスクに入ってベラ

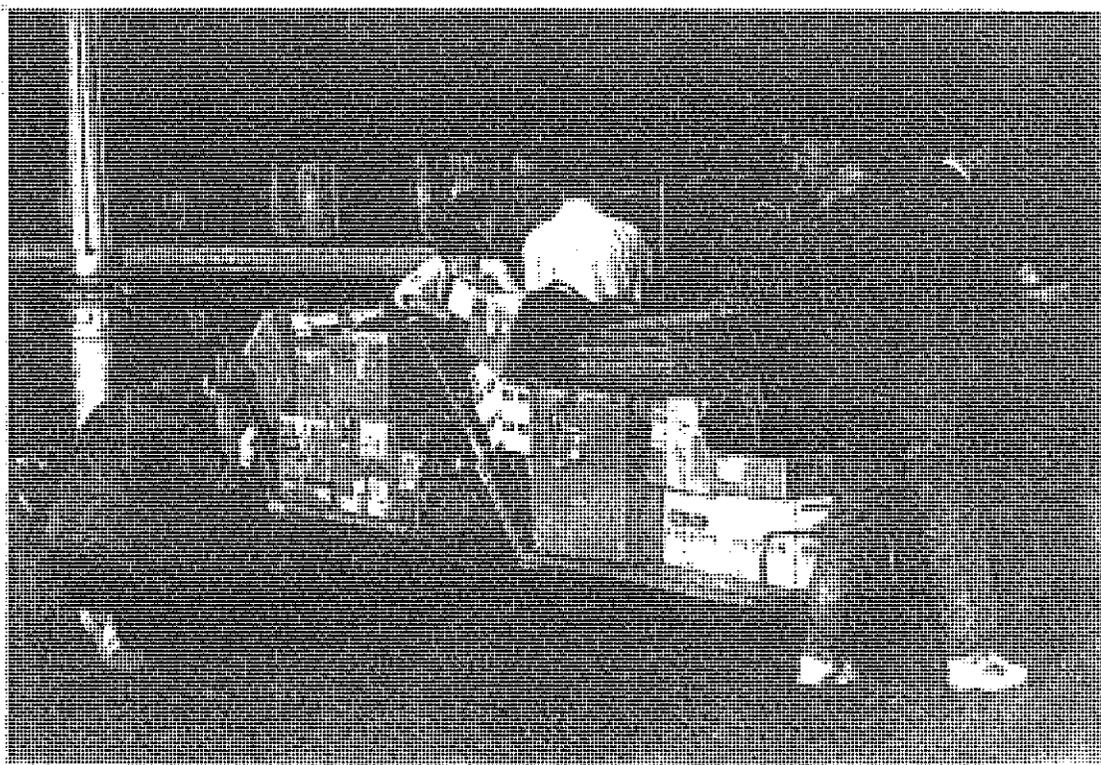
ルーシ外務省でもらうことにして夜汽車に紛れて密入国ということになりました。

【ミチノ墓地】

大使館に取りあえず申請書を提出し、モスクワから北西に二五キロの所にあるミチノ墓地へ向いました。ここはモスクワの総合墓地といったところです。この墓地に、チェルノブイリ事故により死亡した二七人が眠っています。

事故が起こったとき、最初に駆け付けたのは消防士たちでした。一九八六年四月二六日午前一時〇四分、原子炉の出力調整に失敗し、スクラムも間に合わず、チェルノブイリ原発四号炉は核爆発を起こしました。事故の九分後にはプリピャチの町から消防士一七六人が駆け付け、一〇分後には消火作業に入りました。何をやったかという、まず水をかけ始めたのです。消防士た

ちはそれが原子炉の事故だということ、放射能のことを何も知らなかったのだそうです。普通の火事と思い、必死に水をかけました。午前四時までに全てのキエフ州の消防隊が駆け付け、消火作業にあたりました。その結果、多くの犠牲者が出、病院へと運ばれていきました。中でも特にひどく被爆した一二七人はモスクワの第六病院に運ばれたのです。この病院で二六人が次々と死んでいきました。彼らの死体はいくつかの墓地に別々に埋葬されましたが、チェルノブイリの英雄たちの記念碑を造ろうというという声上がり、市民たちが自主的に募金を呼びかけ、ミチノ墓地に合同埋葬されました。またモスクワに送られる前に死亡し、近くの墓に埋葬されていた消防士も家族の強い要望により、ミチノ墓地に他の犠牲者と一緒に埋葬されたわけです。彼らの身体はあまりのも強く放射能で汚染していたために、鉛の棺桶に入れられ



埋葬されました。再び土に還ることのない二七人の遺体が、核爆発から人々を必死に守る姿をイメージして造られた銅像と共に静かに眠っていました。

チェルノブイリ事故の処理のために約六〇万人の軍人や予備役の市民、炭坑夫などが作業にあたりました。今、この六〇万人のディクビダートル（事故処理者）に大きな悲劇が訪れようとしています。

【ビザ無し入国】

夕方、再びベラルーシ大使館へ。ところが『明日、もう一度来なさい』という冷たい返事。『深江さん、ビザはベラルーシの外務省でも貰えます。予定どおり今夜の夜汽車でミンスクへ向いましょう』とアルチョフさん。『そうですね。でも大丈夫ですかね。』『夜汽車だと国境国境を越えるのは夜中ですから警備隊の取締もないでしょう』ということなので、ベラルーシへの「ビザ無し入国」決行となりました。

二一時二四分発ミンスク行きの夜汽車に乗り込みます。ところが山のような荷物を見て『こんな荷物は運べない』今度は乗車を再び拒否されます。『今回の旅はきびしいね。ミンスクまで辿りつけるやろか。』と大分の河野さんが心配そうに言う。するとモスクワ駅周辺を縄張りとしているいわゆる「顔役」がやってきて、一言、二言で話がつきます。仲間がぞろぞろやってきて、アッという間に荷物を運び込んでしまった。『うれしいな』と思っていたら、なんと四万ルーブルも請求されてしまった。四万ルーブルといえばモスクワでは半年分の給料になります。日本で

考えれば十万から十五万円ぐらいか。このさき一体何が起こるか、肝に銘じモスクワを後にする。

大陸鉄道の乗り心地は快適である。座席は一部屋に二人とグリーン車なみだし、ガッタンゴットンもそんなに気にならない。強いて言えば、スピードが遅いことが難点か。一旦駅に停車すると一〇分、二〇分、三〇分と動かない。別に他の汽車を待つ様子もないのだが、停まったまま動こうとしない。そんな調子なのでミンスクに到着したのは午前一〇時三〇分であった。予定では八時三〇分なのである。二時間も遅れたのか、と思っていたら、モスクワとミンスクは時差が一時間。それでも一時間の遅れです。日本人の発想からすれば途中の停車時間を縮めるとか、スピードを少し上げさえすれば、一時間ぐらいの遅れなどすぐに取り戻すことができるのですが、時刻通りに汽車を走らせるという発想はないようです。

■ 七月十三日(火)

ミンスクの空もどんよりと曇り空。少し小雨がパラついています。十二時間の夜汽車の旅に多少疲れていますが、ようやく目的地に着いたという思いで、背筋はピッと伸びています。

ミンスク駅でヤコベンコさんたちと再会。荷物を車に積み込み、ナバト（警鐘・チェルノブイリ同盟の出している週間新聞）の事務所へ。早速日程の確認を行う。ミンスクでは、サナトリウム、保健局、甲状腺の専門病院である放射線医学センター付属病院、コル

フォーズ、おもちゃ工場などを訪問。ゴメリ州ではモズィリ市、カリンカピッチ市、ホイニキ市、そして三〇キロゲートの中に入っていくことなどを確認しました。

ホテルで少し休憩し、保健大臣との会見です。

【保健大臣との会見】

『よくおいでくださいました。最近、日本とは非常に親しい関係になりました。日本は我々が被っている被害を克服した国です。健康を回復するための人道的支援を長期的にさせていただいて感謝しています。日本からの援助というものが、私たちが考えていなかったような計画を示した。その一つがモギリョフ市やゴメリ市への「ササガワ」からの支援であり（検診車を一台ずつ提供し、医師や技師を派遣している）、WHOからの七〇〇万ドルの援助です。あなた方からの援助についても評価し

ています。ヤコベンコさんたちとの共同の事業も有効なものだと思います。特に医療機器を持ってきて頂いたことに感謝します。今後も意見の交換をしていきましょう。また、最近、お互いの専門家の行き来が行われるようになりましたが、心からお礼を申し述べてください。』と、私たちの支援活動に対する感謝の言葉をいただき、ベラルーシ国内でも評価されていることが分かりました。ベラルーシの抱えている現在の状況について、話をしてもらいました。

『いま問題になっているのは、疾患が増えてきたことです。特に甲状腺のガンです。甲状腺ガンは事故前に比べると二七倍に増加した。白血病の変化はない。（事故前に比べ）私たちは増えてほしいとは思わない。糖尿病や生殖腺のトラブルも子供たちに増えてきました。その他に、消化器官や循環器官の障害、免疫機能低下による様々な症状も出ています。出生率も低下した。

После ремонта, благоустройства и технического оснащения вновь открылись двери Международного оздоровительного комплекса "Кюсю-на-Свислочи". Первыми его пациентами стали дети переселенцев из Гомельской области, проживающих сейчас в Бресте. Они прошли здесь обстоятельное медицинское обследование, хорошо отдохнули.



サナトリウム九州で検診を受ける子供

保健省や諸団体が住民の健康を回復するのに困難な状況になっています。高度な医療機器がないために、初期のガン発見が困難なのです。薬が全く不足しています。九一年に比べて医薬品が三一%しかない。この状況は今年になって増々悪くなっている。ロシアからの供給も悪くなっている。両国の関係は経済の面でよくない。ウクライナもそうだ。薬品工場はウクライナにあったため、悪い方向に進んでいる』

こうした面にも、国境の壁が影を落としているようです。最後に、ずっと心の片隅にひっかかっていた疑問について聞いてみました。『ベラルーシ国内の移住問題は怎么样了ですか？』と。

『十三万人の移住が終わっています。十五キュリー/km以上の汚染地に住んでいる人々には移住を進めているが、(そうした)汚染地にあと何人住んでいるのか政府もつかめていない。自力で移住した人も居るし、人々が危険性を認識していない、という状況も影響しているのでは』ということでした。やはり、という返事でしたが、すでに移住の問題はこれ以上進展しないのではという気がした。

席を立とうとしたところで、突然大分の河野さんが、『どんな医療機器を必要としていますか？』という質問をしてしまった。相手は保健大臣です。聞いたところで私たちがそれを保証できる訳ではありません。しかし、さすがに相手も政治家です。『のぞみは大きいけれど、皆さんの出来る範囲でお願いします。そうですね。内視鏡、エコー、血液分析器、こういった機器が必要です。』

フムフムという感じで保健省をあとにした。細かいデータ類については後日もらえるとのこと。

ホテルに移動しながら、ヤコベンコさんと、ミンスクに着くまでの様々な苦労話をしました。在日ロシア大使館ではベラルーシへのビザは発行しなくなったこと。モスクワでもビザが貰えなかったこと。アエロフロートも支援助物資にもかかわらず、料金を請求したため、五〇キロ分の荷物を持ってくれなかったことなどなど。『私たちにはそんなことは何一つ知らされていない。』という言葉に、政治と生活はまだまだ切り離されているのかな、という感じを受けました。

■ 七月十四日(水)

この日は、コルフォーズ、サナトリウム、放射線医研究所付属病院を訪問する予定だ。

昨日の夜は、みんなで軽くウッカを飲んで、シャワーを浴びて午前〇時過ぎに就寝です。「九時にナバトの事務所」ということだったので八時三〇分までゆっくり寝ていたいと思っていたのに、同室の河上さんが朝早くから起きだして、シャワーを浴びたり、髭をそったりとゴソゴソしている。「ウーン、もう少し寝かせてよ。」と思いつつも早く目覚めてしまう。朝方差し込んでいた日差しもいつしか消え、「はー、今日も雨か」という天気です。気分は冴えませんが、今日もしっかり仕事をしなければ。「うん。頑張るぞ。」まだまだ元気です。

【チェルノブイリカンパニー ?】

『午前中コルホーズに行きましょう。それからサナトリウムに。』ということだったので、サナトリウムに食料を供給しているファイコー・コルホーズのことかと思っていたら、オットどっこい。なんと「朝鮮人参」を作っているところでした。

『これは何という野菜ですか。』『ジンセンです。』『ジンセンは何ね』『うん。ちょっと調べようかね。えーと、ジンセン、と。朝鮮人参てよ。』『あー、だから人鮮ね』

『深江さん、このジンセンを日本に輸出できませんか。五年目に収穫することになっており、今年から毎年二・七トン（乾燥したもので）収穫できる。薬としてサナトリウムでも使うが、大部分は輸出に回したいという意向をもっている。どうだろうか』という。と言われても『分かりました。帰ったら検討してみましょ。』という訳にもいかず、それでも『乾燥もので二・七トンの朝鮮人参か。』『売れば、す

ごいお金になるね。』『深江さん、もう郵便局やめて商売替えしたら。』『そうやね、みんなでチェルノブイリカンパニーでも作ろうか、商売人を一人引き込んで。』とまあ、好き勝手なことをいいながら、スタイキ村へ移動します。

【サナトリウム・九州】

ベラルーシ共和国の首都ミンスク市から東に一五kmほどの所に、ミンスク州スタイキ村というところがあります。ここに旧ソ連時代、オリンピック選手専用のスポーツリハビリ施設が建設されました。文字通り、スポーツ施設としては最高の設備を誇っています。今ではベラルーシの施設となっています。

『深江さん、今からサナトリウムに行きますが、残念ながら子供たちには会えません。サナトリウムはいま、改修工事をしています。七月には終わる予定だったのですが、間に合いませんでした。』



リハーサルを重ねる「パレスカヤ・ゾーラチカ」の子供たち

『全面的な改修工事なのですか。』

『そうです。配線、配管をやり直し、スチーム暖房ができるようにします。それにベッドや机を子供用にします。部屋の模様替えもやってます。』

というわけで子供たちとの劇的な対面のシーンは空振りに終わってしまいました。

『これは困った』わけですが、というのも今回の訪問の目的の一つは、サナトリウムのその後を調べてくることなので、日本人の発想からすれば、改修工事のたぐいはオープン前に終わらせるのが当然と思うのですが、『改修しないと使えなかったのですか。』と聞いたところ、『そうです。古い施設ですから、今後のことを考えれば、早いほうがいい』『オープン前に終わらせることは出来なかったのですか?。』『改修工事はスタイキの責任で行います。費用もスタイキがもちます。オープンするかどうか分からないのに、先に工事はしません。』

なるほど、というわけです。

事情は分かったので、さっそくサナトリウムを散策しながら、これまでの利用状況について話を聞きます。

スタイキ……。広大な敷地のなかにたたずんでいます。スピイスロッチ河がゆったりと流れ、河の向うには体育館、プール、テニスコートやグラウンドなどの体育施設が並び、寄宿舎、食堂、医療棟、映画館、サウナ棟などは白樺の木立の中に点在するというすばらしい環境です。

サナトリウムは、二つあるゲストハウス（寄宿舎）のうちの一棟（四階建て）を借りてオープンしました。様々な施設の使用料も賃貸料のなかに入っ

ている訳です。

【これまでの利用状況】

昨年一二月一日、ゴメリ州カリンカビッチ市とその近郊の子供たち一〇〇人と一〇人の教師がサナトリウムの記念すべき第一期生として迎えられました。その後、一月にはゴメリ市から六〇人、第三期生として二月には一三〇人の子供たちがレシチツ市から訪れています。第四期生は再びゴメリ市から一三一人が訪れ、第五期生にはスベトログルスク市から八三人、ゴメリ市から三一人の子供たちが保養と検診、治療をかねてやってきました。

これまでに汚染地に住む六〇〇人ほどの子供たちを受け入れてきましたが、ほとんどの子供たちが、一度も検査を受けたことのない子供たちでした。スベトラゴルスク地区から入所したフェレモンシュク先生は、『私のクラスの二〇人の子供を連れてサナトリウムに行ってきた。エコーで検査したところ、私を含め全ての子供に甲状腺肥大の症状があった。そのうち三人は三度まで進んでいたため、すぐに治療を始めなければいけないほどだった。スタイキはすばらしい。健康増進のための設備は整っているし、医療設備もある。』と評しています。

血液分析器や自動血球計測装置は今回持参しました。「サナトリウム・九州」の意義は、ますます重要になってきています。

【放射線医学研究所付属病院】

この病院には二年前にもやってきま

した。チェルノブイリの後遺症に苦しむ大人や子供を治療するために、一九八九年一月に開設したばかりのサナトリウムタイプの病院です。四つの病棟に大人と子供、それぞれ一〇〇人ずつ入院しています。専門は内科と甲状腺です。現在、外科病棟を増設中でした。

副院長のウラジミール・ザジーバさんに話を聞きます。

『この病院は、チェルノブイリの被害に苦しむ人々のために、政府高官用のサナトリウムを病院に改造しました。年間四千人ほどの患者が訪れますが、そのうち子供は二五〇〇人ぐらいです。また、ディクビダートル（事故処理者）も八〇〇人います。彼らにいま様々な疾患が増えています。最大の問題は、甲状腺の問題です。この一年間にガンが増加しています。事故前一〇年間に子供の甲状腺ガンは七例でした。それが今年の三月までで一五七例です。その他、免疫機能低下が原因ではないか

と思われる、麻疹やおたふく風邪などの伝染病が増えている。消化器官などの病気、潰瘍も。』

二年前に比べて、かなり状況が悪くなっている気がする。病院内を案内してもらった。病室のドアには子供たちが自分たちで書いた絵が貼ってある。

『どうです。かわいい絵でしょう。みんな違うんですよ。子供たちが思い出にと、描いていくんです』と。

しばらくすると入院している子供たちに出会った。看護婦さんが子供たちの状況を話をはじめ。

『ナターシャです。十四才になります。ホイニキから来ました。九一年に甲状腺肥大で手術をしましたが、今回検診と手術のために来ています。』『アンドレ君です。まだ五才になったばかりです。ミンスク市に住んでいます。甲状腺肥大で手術をしました。』『この子はカーチャです。ゴメリ市から来ました。十四才です。九二年に甲状



甲状腺ガンの手術をした子供たち

腺の手術をして、今回は治療のためにきています。成長がとまってしまったのですが、二カ月間の治療で五センチ伸びました。』『この子は……。』と続きます。『大丈夫？。苦しくない。』と尋ねると、『フフ、平気だよ。』と明るく答えてくれた。

甲状腺肥大でどうして手術をするんだろうかと思っ、後で聞いてみたら『みんなガンだから手術をしました。でも、本人たちの前では言いません。』『アー、そうか。』あまりに安易に考えすぎていた自分が恥ずかしくなりました。『そうなんだ。子供たちに病氣と闘う強い気持ちを持たせることが大事なんだ。』 それにしても『ガン』に冒される子供たちが多すぎる。

一日も早く元気になってほしいと祈るしかない。

放射線医学研究所付属病院で遅い昼食をご馳走になった。二年前もここで昼食をご馳走になり、その時「クリュクワの実」のジュースを飲んだ。『このジュースはクリュクワという木の実に作っています。体内に取り込んだ放射能を早く外に出す作用があるのです。皆さんも飲んでみてください。』と真面目な顔でジュース（カンポート）を勧められたのを覚えています。甘酸っぱい美味しさでしたが、今回の旅で、本物の木の実を食べることが出来ました。場所はモスクワなのですが、とても酸っぱい赤い色をした木の実でした。

(以下次号)



検査を受けるベラルーシの子ども

ベラルーシの
子ら無料健診
鹿児島・始良で
ベラルーシ共和国モズイ

リ市から民族舞踊公演のため来日した十六人が十三日、鹿児島県始良郡始良町の青雲病院(川井田浩院長)で、チェルノブイリ原発事

故による放射線障害の健康診断を受けた。

子供民族音楽団「パレスカヤ・ゾーラチカ」の八十三歳の子供十二人と大人四人。同市はチェルノブイリから約百キロの放射能汚染地帯。市民グループ「チェルノブイリ支援運動・九州」の招待で来日したのを機に、放射線障害に詳しい同病院の横山富美子医師(前)が無償で検査を申し出た。

甲状腺せんエコーや血液検査などの四種類の検査を受けた。結果は、一人に甲状腺せん萎縮、五人に白血球過多の症状があった。

救援訴え「ドールブルーイ・ジェニー」

チェルノブイリの子供たちが北九州市にやって来た。平野小児童たちの折り紙細工プレゼントに、日本語の「赤とんぼ」合唱でこたえた。

朝日



平野小の児童と一緒にパソコンに向かうベラルーシの子供たち
＝八幡東区の平野小学校で

ベラルーシ共和国(旧ソ連)の子供合唱団「パレスカヤ・ゾーラチカ」。七歳から十三歳のメンバー十二人が八日、北九州市公演の合間をぬい、八幡東区の平野小(松尾俊二校長)を訪ねた。

最初に一年生の国語の授業を見学。黒板の前に十二人が並んで、日本語で「コンニチワ」とあいさつした。一年生たちは「ロシア語では何というの」。さっそく教えてもらい、元氣よく「ドールブルーイ・ジェニー」と答えていた。

六年生の教室では、ベラルーシの児童が一人ひとり自己紹介。「落第はありますか」「通信簿は何段階評価ですか」など互いの学校

について質問があった。児童たちはベラルーシの子をわっと取り囲み、自作の折り紙細工や鉛筆などをプレゼントした。

ベラルーシの子はお礼に、滑らかな日本語で「赤とんぼ」を合唱した。リリア・プガエンコさん(三)は「廊下に絵や学級新聞が張ってあってきれい。パソコンが教室にあるのもうらやましかった」と話していた。

来日した子供たちは、チェルノブイリ原発から約百キロのモズイリ市に住む。元氣いっばいに見えるが、付き添いの医師ラリサ・ヤコベンコさんによると、全員、放射能の影響で甲狀腺に異常があるという。十八日まで、九州・山口の九都市で公演、歌や踊りでチェルノブイリで被災した子供たちの救援を訴え